Lucus

高峰　祐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｕｃｕｓ

【Ｎコード】
Ｎ６３７９Ｕ

【作者名】
高峰　祐

【あらすじ】
都心部の高校に通う相楽　透
透の前に突如として現れた謎の異国美人
その人物との出会いを皮切りに、透は世界の闇を目にする―

#1　go　for（前書き）

初めての連載です。
書きたいもの書いてるような感じです。
最後までお付き合い頂けたら嬉しいです。

#1　go　for

7月上旬。東京都―

ジメジメとした梅雨の時期も明け、本格的な暑さがやってきた
東京都心部。例年よりも15日遅い真夏日を迎えたこの日も、彼女にとってはいつもの日常と何も変わりなかった

相楽　透は授業終了のチャイムが鳴ると、今日出された数学の宿題や教科書、ノートを鞄に詰め込み教室を出た
廊下に出ると家路へと就く生徒の波の中から一人の少女が透の方へと近付いてきた

「お疲れー、今日は委員会良いの？」

右手をひらひらと躍らせて少女はそう透に喋りかけた

「うん、今日は生徒会無いんだ。一緒に帰れるよ」

「やりぃ！んじゃ今日はあそこ寄ってこーよ、駅ビルのカフェ。昼間っからずーっと甘いもん食いたくってさー」

「前に行った時もそんな事言ってたよ、花南ちゃん」

「そうだっけ？」

互いに笑い合いながら二人も生徒の波の中へと混ざり、昇降口へと向かった

途中、何人かの生徒が窓の外に身を乗り出すようにして何かを見ている事に気付いたが、一緒になって身を乗り出そうという気持ちにはならなかった

昇降口に着いてから、二人は初めて違和感に気付いた
校門の前に一台の車が止まっていた。生徒達は皆、その車の方を見て何かを喋っている
しかし、ただ車が止まっているだけなら誰も何とも思わないだろう

「ランボルギーニだぁ……」

「らんぼるぎーに？」

「あの車の名前だよ。」

「詳しいねー透」

「お父さんが車好きだから、ね。でもどうしてこんな所に停まってるんだろう…」

そう、校門の前に止まっていたのは高級外車のランボルギーニ
車に詳しくない人間でも、一目で高級車だという事が分かるであろう車だ
一般の人がそう易々と手にする事が出来ない代物。それがこんな平凡な高校の門前に停車している
それだけでも生徒達の話題の的になる事間違いなしなのだが、話題の種は多分もう一つあった

ランボルギーニの前には一人の女性が煙草を吸いながら立っていた
肩くらいまである綺麗な茶髪。服装は短パンにTシャツとラフな格

好だった
サングラスをかけている為、表情はよく分からないが一見してとても綺麗な外人だという事だけは分かった
高級外車にモデル並みの美形外人。片方だけでも学生達の間なら明日の朝まで話題が持つくらいだ
その一角だけまるで別の世界のような雰囲気を漂わせていた
「分かんないけど…誰かの知り合いかね？しかし美人ねぇ」
「うん…」
二人は靴に履き替えている間も、その車の方から目が離せないでいた
校門の方へと向かう途中、透は異国美人と目が合ったような気がしたサングラスをしてい視線が何処にあるのかも分からないし、気のせいだという事にしてその異国女性と車を横切ろうとしたその瞬間
「ヘイ！お嬢ちゃん。ちょっと待ってくれ」
一瞬ギクリとした。異国女性は少し訛った日本語で透を呼び止めた
驚きのあまり振り向く事も返事をする事も忘れて、数秒間その場に立ち尽くしてしまった
「おい、聞こえてんのか？」
異国女性は回り込んでサングラスをずらし、上目遣いに顔を覗き込んで来た
その瞬間、我に返った透は「い、いえすいえすいえす！」と不慣れな英語で応答した

「日本語で良いぜ。まぁ英語が喋れるってんならその方が助かるけど、その様子じゃ無理そうだしな」

サングラスの位置を戻しながら意地悪そうに笑った
今の「いえす」の一言だけで、透が普段からあまり英語を使い慣れていない事がバレてしまったらしい

「ねぇ、透の知り合いだったの？」

「し、知らないよ…」

透の耳元で小声で喋る花南に透は小さく首を横に振りながら答えた
この状況を誰かに説明して欲しいのは透の方だ。一体何がどうなったらこんな異国美人に話しかけられる事になるのだろうか
授業中よりも頭を使っているのでは無いかと思うくらい考えてみても、心当たり何て微塵も無かった

「サガラ　トオルだな。お前さんの親父さんからの依頼でな。ちょっと一緒に来て貰うぜ」

#2　go　for_2

見慣れた街の景色が通り過ぎて行く
いつもは父の運転する乗り慣れた自家用車の後部座席で船を漕いでいる頃だろう

だか今日は乗り慣れない高級車の助手席。運転席には異国美人
走り始めて約５分。二人の間に会話は無い
気まずさのあまり透はずっと窓の外の景色を眺める事しか出来なかった
この異国美人と同行する事になった理由、それはつい１５分程前の話

「父が…？」

「そ。ほれ、これが誓約書。んでこっちがお前さん宛ての手紙」

異国美人は不審がる透に誓約書と手紙を合わせて差し出した
透は恐る恐る受け取ると、まずは誓約書の方に目を通した

そこには透の身の安全を保障する内容と、万が一の不測の事態には透を護衛・保護する等といった事が記されていた
そして最後には英語で　Ｌｉｔａ　という英語の名前の署名が入っていた

とりあえず文面を見る限りでは透へ危害を加えるつもりはない事は分かった。だがしかし目的や意図が分からない
透は４つ折りにされただけのメモのような手紙を開いた

そこには確かに父の字でこう書かれていた

”　透へ　”

”　これを読んでいるという事は、もうリタと会ったという事だろう　”

”　近々良くない事が起こると思う。リタはその為に雇ったＳＰ、いわば護衛だ　”

”　詳しい事はリタから後々説明がある　”

”　お前の身の安全の為、お前はリタの言う事を良く聞いて一緒について行きなさい　”

「ど、どういう事…？良くない事って何ですか？」

手紙を読んでも状況は理解出来なかった
ざっくりしすぎていて、要領を得ない内容
この手紙に透は不信感を抱いた。それはこの手紙の中に出てきたリタという人物にでは無く、自分の父親にだった

「まぁまぁ落ち着けお嬢ちゃん。ここで話すような内容じゃないぜ」

煙草に火をつけ、ふぅと煙を宙に吐く異国美人
父の手紙の内容からすると、この人物がリタと呼ばれる護衛のようだが透にはただの観光気分の金持ち貴族にしか見えないでいた

「とりあえず場所を変えよう。そしたらお前さんの納得いくまでい

くらでも話してやるからよ」

そう言いながらリタは親指を立ててランボルギーニを指差した
気が付くと周りには数十名の生徒達による野次馬が出来ていた
ただの勘だが、他人に聞かれたくない事である事は容易に察しがついた
このリタという人物と接点があるという事さえも他人に知られたくなかったくらいだ

「ね、ねぇどうするの透……」

隣で不安げに透の腕をつかむ花南。透は少し迷いながらもゆっくりと花南の手を腕から離した

「ごめん花南ちゃん。カフェはまた今度。ごめんね？」

そう言うと透はゆっくりとランボルギーニの方へと歩み寄った
リタは煙草を捨ててキーでドアを開き、運転席側へと身を翻した

「透…！」

縦に閉まっていくドアの向こう側で、透は精一杯の笑みで手を振った

#3 go for_3

「リタ…さん？聞いても良いですか」

「あん？何だ」

思い切って声をかけてみた。返答は強めな口調で帰ってきた
このリタという人物、外見は美しいのにとても口が悪いようだ
まるで男みたいに喋る。そのせいもあってか透は質問するのをやめようかと思うくらい萎縮してしまった

「その……この車…ええと私達は…何処へ向かってるんでしょう…」

走り始めて４５分以上が経った。気が付けば透の知っている景色では無くなっていた
何となく建物が少なくなっている。そして人気も車どおりも少ない所へ向かっている
そして方角的に海に向かっている気がした。透は質問する口調に不安を隠せなくなっていた

「港だよ」

リタは表情一つ変えずにそう言った
透はその言葉を聞いた瞬間、全身から血の気が引くような感覚に襲われた。
嫌な汗が止まらない

「港へ行って…そして？」

聞きたくない。答えて欲しくない
そう思っているはずなのに聞きたくてたまらない。だから発してしまった一言

「お前は察しが良いな。飲み込みが早いのは良い事だ。嫌いじゃない」

ニヤニヤと笑いながらリタはアクセルを思い切り踏んだ
急な加速に透の身体はガクンと前のめりに倒れた
シートベルトを掴んで、身体を起こし窓の外へ目を向けるとそこは港だった

一際大きく、ドクンと鼓動が高鳴った
大きな倉庫の立ち並ぶ、港。海の上には大きな貨物船が浮かんでいた
辺りはもう夕暮れを過ぎ、夕闇に包まれ始めている
その雰囲気がより一層不安と恐怖を引き立てる。自分の知らない世界が目の前に広がっている—そんな気がした

そしてその知らない世界へと、これから入っていく—？

「……イ、ヘイ！着いたぜ。とっとと降りろ」

「あっ…は、はい」

いつの間にか車は一つの倉庫の前で停車していた。リタに急かされるまま鞄を手に港へと足を降ろした
潮風が吹き抜ける。身体が少しだけベタつくような海風独特の感覚
海に来たのは去年の夏、友人とバーベキューをしに来て以来だった。

今年の夏もバーベキューを行う予定だったが、一足先にこんな形で海に訪れる事になろうとは考えもしなかった。

感傷に浸りながら、これから起こる不吉な”何か”の恐怖から必死に目を背けようとした
けれどどんなに愉快な事を思い出し、考えても身に迫る恐怖から逃げ切る事は不可能だった

「こっちだ、着いてきな」

リタはシャッターの半分開いている一つの倉庫の前で手招いている
あの中に入ったら、もう戻れない気がする。もしかしたら殺されるのかも知れない
そんな考えが頭を過ったが、きっと逃げる事は出来ない

例えば今この場から逃げるために全力で走ったとしよう
１００歩譲ってあのリタとかいう人物から逃げ切る事が出来たとしても、ランボルギーニが相手だったら？
競争をした所で１００％勝ち目なんてない。どうせすぐに追いつかれて捕らえられる。
そして今度は逃げないようにと身を拘束されたまま倉庫内へ連れて行かれるのがオチだろう
もしくは暴れないようにと多少の暴力的制裁があるかも知れない
誓約書と言っても所詮は紙切れなんだという事に気が付くのは、いつだって生命の危機が訪れてからなのだった

招かれるままにリタの方へと足を進める。半分開いたシャッターを潜り、二人は倉庫内へと足を踏み入れた
ツンと鼻をつく鉄錆の臭い。透は一瞬顔を顰めた
倉庫内には大きなコンテナがいくつも積まれ、上から布がかけられ

ている。中身が何かは知りたくない

「よぉ、随分早かったじゃねーか」

丁度倉庫の中央。コンテナの上に座り、トランプをする男女がそこには居た

男性は黒いワイシャツに紺のスラックスといった一見すると普通のサラリーマンのような風貌だった

少し長い黒髪は後ろで一つに纏められている

年齢は２０代後半くらいだろうか。少し疲れた顔には無精ひげが生えている

女性の方は白いパーカーにチェックのスカート。スカートの下にはスパッツを穿いている

綺麗なブロンドの髪の毛はポニーテールにされている

こちらの女性は若々しく、大体２０代前半。リタと同じくらいに見える

「案外あっさり着いてきてくれたからな。日本人ってのは聞き分けが良くて助かるぜ」

リタは女性の隣に腰を下ろすなり、煙草に火をつけた

立ち尽くす透に目をやる女性と男性。そして女性はにっこりと微笑んで透に話しかけた

「写真よりべっぴんさんじゃないか。お前さん良い値で売れるぞー」

その一言に、透の身体は硬直した

「う、売れる…売れるって…何……何が売れるの…？」

震えた声で問い返した。すると不思議そうに女性は首を小さく傾げてリタの方に目を向けた

「何だリタ。お前何も説明してねーの？」

「まだ説明はしてねーけど…お前気づいてたんじゃねぇのか？」

透はその場にぺたりと膝から崩れ落ちた
不吉な予感に気付いてはいた。それは間違っていない
殺されるんじゃないかと思ってた。けど違った。殺されずに済んだけど、だから？

殺されるのも売られるのも、今の私にとっては大した違いなんてない
この場でこの人達に殺される事は免れても、売られたら？
売られたらどうなるの？どうされるの？
ぐるぐるぐるぐると考えが巡る。悪い方悪い方へと

臓器で二つあるものを考え始めた。どこかで見たか、聞いたことがある
どうして2個あるか？それは1個無くなっても大丈夫なようにあるんだと

臓器を、取られる？それって、どうなるって事？
臓器ってどうやって取るの？身体を切って、取るの？
身体を切られたら、どうなる？それって死ぬって事？

死ぬの？死ぬの？殺されるために売られるの？
どうして売られるの？誰が私を売ったの？

父が私を、売ったの？

冷や汗を拭い、鞄から携帯を取り出した。震える指先で必死にアドレス帳の中から父を選びやっとの思いでコールボタンを押した
呼び出し音が鳴る。携帯を持つ手が震えて今にも落としてしまいそうだった
呼び出し音が鳴る。もう１０秒程鳴らしている。電話口には誰も出ない
更に１０秒が立つ。その瞬間、プッッっという電子音が聞こえた

「おとうさー…！」

―タダイマ　デンワニ　デルコトガ　デキマセン

その瞬間、携帯電話は透の手から滑り落ちた。携帯はコンクリートの床にガチャンと音を立てて転がった
電話口ではまだあの機械の音声案内が続いている

「相楽商事は経済的にかなりの負債を背負い込んでいる」

リタは棒読みで喋り始めた

「これ以上金を貸してくれる会社も無い。人もいない。首の回らなくなった相楽商事の社長、相楽（さがら）　昌良（まさよし）は娘を米国へと売り飛ばす事に決めた」

淡々と喋るリタの口調に、感情はない
煙草を吹かしながら、ただただ機械的に、形式的に説明をするだけ

だった
透はその言葉の一字一句に耳を傾けた。聞けば聞く程吐き気のする内容でも、今の透には聞く事しか出来なかった

「嘘…？」

「嘘じゃねぇよ。お前は売られたんだ。可哀想にな」

電話口の機械の音声案内は、いつの間にか終わっていた

#4 go for_4

貨物船内の客室。１０畳程の小さな部屋に、男女４名
窓から覗く外の景色は、果てしない漆黒の海
海と空が混じる。どこからが海で、どこからが空か分からない

粗末な布団の上、透は窓からその暗闇をただ眺めていた
隣では心地よさそうな寝息が複数聞こえた。貨物船に乗り込んでから約１時間。透はずっと窓の外を眺めている

「着くまでまだあと１２時間はあるぞ」

眠そうな声が透の耳に届いた。声は透の背後から聞こえた
振り向かなくても声で誰だか分かった。最も、振り向く気など無かった。酷い顔を誰かに見られたくなかったから

「起きてたのね…」

「今目が覚めたんだよ」

リタは上半身を起こして、ボリボリと頭を掻いた。そして枕元に置いたであろう煙草を手探りに探している
透は闇に眼が慣れていたお陰ですぐに煙草の在り処が分かった。そっと指先で煙草をリタの手の触れる位置へとずらした

「しかしまぁ。自分可愛さに娘を売るたぁ、お前の親父もロクなもんじゃねぇなぁ」

ジッポの火が一瞬だけ部屋を明るく照らした。リタが一息吐くと煙

草の臭いが部屋に広がった
透は煙草が嫌いだ。臭いを嗅ぐだけで頭がくらくらとする。でも透の周りにはいつも煙草を吸う人間がいた
売られる今になっても、変わらないなんて。そう思いながら布団へ寝ころび枕に顔を埋めた

「私は、実の娘じゃないから」

その言葉を耳にした時、リタは煙草を吸う手を一瞬止めた

「養子か何かか」

「ううん。連れ子なの、私。母の連れ子。でも、その母とも血は繋がってないのよ」

「ややこしいなぁ。つまりどういうこった」

「元々は父子家庭だったの。小鳥遊が前の姓だった。私を産んだ母は持病が悪化して幼い時に死んじゃった。

そして１４歳の時に父が再婚した。けど会社の事とか再婚相手の母と色々あって自殺した。

それからすぐ母は私を連れて今の父と再婚したの」

淡々と語った。不思議と悲しいという思いは無かった
ただ、事実を喋ってる。それだけだった
今でも思い出せる光景。母の死。父の再婚。父の自殺。母の再婚
最初はただただ悲しかったけれど、それも最初だけ

父の自殺の光景を目の当たりにした時、私の中から何かが無くなったような感覚があった
それが何なのかは分からないけれど、大事な何かだという事だけは何となく分かる

「複っ雑だなぁ。要するにたらい回しにされたのか」

「さぁ。そうなのかな…」

「まぁ同情ぐらいはしてやるよ」

「ありがとう…」

リタは透の返事に少し驚いたようだった。意地悪半分に言った言葉に素直に感謝されたから

「お前、変わってんな。さっきまでこの世の終わりみたいな顔して呆けてた癖に」

「そうだね…うん。もう終わってるんだよ」

透は顔を上げ、再び窓の外へと目を向けた
もう終わっていたんだ。父が死んだあの日から
自分を分かってくれる人は、もういない。自分しか自分を分からない
それってもう一人って事と同じなんだ
多分ずっと前から分かっていたけど、ちょっとだけ信じてたんだ
自分を分かってくれる人が現れる事に

でも、もう駄目なんだ。もう現れないんだ
命の危機に瀕しても、命を張って守ってくれる人は現れない。それ

が答えだ

「もう、終わってたんだよ」

一筋の涙が、零れた

#5 go for_5

母が亡くなってから、私達は二人だけの家族になった

父はとても穏やかで物静かな人だった
母が亡くなった晩、父は私のいない所で声を押し殺して泣いていた。
私はそれを遠くから隠れて見ていた。父の泣き顔を見るのはとても心苦しかった覚えがある

私と父は約束をした

「透。お父さん達はお母さんの分まで一生懸命生きるんだ。沢山努力して、笑って幸せに暮らす事。

それが今、お母さんにしてあげれる事だよ」

母の分まで幸せになる。それが自分に出来る事
母の死を乗り越えて、私と父は精一杯楽しく生きた。穏やかな日々の中で、沢山の思いでを作った

そうして私が高校へと上がった年、父は以前から仲の良かった職場の女性と再婚をした
再婚の話を聞いた時は少し戸惑ったが、小さな頃から男手一つで私を育ててくれた父の幸せを願い私は賛成した
それが間違いだと知るのは、父が再婚をしてから1年が経った時だった

再婚をしてから半年が経とうとしていた時期、父の勤務先である企

業が経営悪化で突然倒産した
父はすぐに職を探すために奔走していたが、新卒者でさえ職にあぶれるご時世だった為、中々職は見つからなかった
父はアルバイトをいくつも掛け持ち、昼も夜も無く働いていた。それでも私と母を養うには十分とは言えない経済状況だった
日に日にやつれてゆく父を見ていられず、何度も何度も止めたが父は大丈夫だと笑顔で微笑むばかりだった

そんなある日、母が浮気をしている事が発覚した。それが今の父である、相楽　昌良だった
母は金の亡者だった。再婚当初は穏やかな女性を演じていたが父の稼ぎが無くなった途端に化けの皮が剥がれたのだ
父の財布からお金を盗み出し、毎晩のように相楽と密会をしていた

私はその事実を知っていた。父も知っていた
けれど父は見て見ぬふりをした。父は母を信じていたから。そして愛していたから
だから父は何も言わなかった。そして私もそんな父の気持ちを知っていたから何も言えなかった

母は気付かれていないと思っていた。だから私や父にはいつも通り上辺だけの笑顔を作り、思ってもいないような優しい言葉で接してきた
父を苦しめる母が大嫌いでたまらなかった。
お前の悪行は全部知ってるんだと何度も言いたくなった。けど父はそれを止めた
だめだと言う父の表情は今にも泣き出しそうで、その表情を見る度私は一人家を出て泣いていた

そして悲劇は突如として起きた

2年への進級式を終えて帰宅したその日、父は今で眠るように死んでいた
死因はオーバードーズだった。テーブルにはいくつもの薬が散乱していた

父が2年前から鬱病を患い、精神科医にかかっていた事を葬儀が終わってから耳にした。母もその事は知らなかったらしい
父は一人で苦しんでいた。悩んでいた。誰にも言えないでいた。そして愛した人に裏切られた

「貴女が父を殺したんだぁ！」

葬儀中、めそめそと嘘泣きをする母を前にして私はそう怒鳴った
それでも周りの親族はこの女の”良い”部分しか知らない。だから私の言葉を信じない
それどころか、あまりのショックに気が狂ったのだろうと周りからは憐みの目で見られた

その時から私は、一人になってしまったんだ

父の葬儀を終えてからすぐ、母は私を連れて相楽と再婚した
母も私が大嫌いだった。けれど親族の手前もあったので仕方が無く引き取ったというだけの話
相楽は元から子供が嫌いだった。引き取られてから口を聞いたのは数える程度
母からは毎日のように小言や嫌味を言われる。私は完全なるストレスのはけ口となっていた

望まれない。必要とされない。愛されない
だから今、私はここにいるんだろう―

煙草の臭いで目が覚めた。いつの間にか透は眠りについていたようだった
重たい瞼を開けてみると、部屋は明るかった。朝日が窓から差し込んでいた
隣では壁にもたれながら煙草を吸うリタの姿があった

「よお。良く寝れたか？」

「私いつの間に…」

「さーなぁ。べそかいてたと思えば寝てたからな」

「えっ」

慌てて目元に手を当てる。なんとなくだが腫れているような気がした
泣いた事を覚えているけれど、そんなにわんわん泣いたのだろうか。
そう考えると急に気恥ずかしくなった

「おーうお姫様！ご機嫌いっかがー？」

甲高く陽気な声が客室内に響いた。開かれた客室のドアの向こうから、あのブロンド髪の女性が現れた
女性はトレーの上に乗せた４つのマグカップの一つを掴み透の前へと差し出した

「ほれ、シャーリィ様の入れたコーヒーだ。有難く飲めよう」

「あ、ありがとうございます」

差し出されたマグカップを受け取る。暖かなコーヒーの良い香りが眠気を忘れさせてくれた
普段コーヒーはあまり飲まないし、好きな方では無いのだが状況というスパイスが苦手なものをとても美味しいものに変えてくれた

「シャーリィ、またインスタントかよ。ドリップのヤツにしろっつったろ」

リタはシャーリィの入れたコーヒーに不満げな表情で文句を垂れつつ啜っている

「船ん中なんだ、しょうがねーだろう。文句言いなさんな」

「そうだぞ。シャーリィがコーヒー入れてくれる事さえ珍しいんだからなぁ」

「余計な事いうんじゃないよハイネ」

シャーリィの隣で毒を吐く男がハイネ。意地悪そうに笑っている
透はそんな光景を見て、不思議と気持ちが和んだ。自分を攫い、海外へと連れて行くこの怪しい人物達を何故だか嫌いになれないでいた。
その理由は分からない。だけど、この人達が誘拐犯で良かった、などと訳の分からない事を一人思っていた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6379u/

Lucus

2011年10月9日09時43分発行